
夜桜乱舞

桜坂電波塔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜桜乱舞

【Nコード】

N5435R

【作者名】

桜坂電波塔

【あらすじ】

5つの大国が存在する世界。その中心の国、メーズローゼンでのある事件をきっかけに、2勢力による、表の人間の知らない大きな戦いが幕を開けた。

世界のほとんどを敵に回して戦う“夜桜”達は何を思い、何のために戦う？

壱・呪われた運命から外れた少女は事件の一角に巻き込まれ、事件の関係者との出会いから全ての真実を追い求める。

式・利用され続けた少女は運命に囚われ、何も信じず真実を盲目的に否定し壊して回る。

How About New Heroine?

《HPとくっつきました》

零 全てが始まった日に

—

世界歴666年6月9日

この世界に5つある大国のうち、ど真ん中に、その国　メーズローゼン　はあった。

そして、さらにその中心部、この世界を作り出した神がすむという伝説さえもある神殿がある、神域と言う村。

その日、そこで起こったのはとても大規模な火災。

「やだ…村中みんな燃えてる…。どこに行けば出られるの…」

赤い髪の少女は周りを見渡して、震えた声でつぶやく。

この火災は、ある1件の家が燃えたのち、ものすごい速さで他の家に燃え移って行き、村全体を全て焼き尽くす大火災となっている。

「お父さんもお母さんも一番火が強い神殿にいるらしいし…私一人じゃどうすればいいかわからないよ…」

目に涙がにじむ。無理もない、彼女はまだ11歳。こんな大規模な火災を前にして一人きりで、怖くないはずがない。

ついに糸が切れたのかへたり込んでしまったが、

「おい、何してる。焼け死ぬぞ！」

「え、きゃあつ！ちょ…誰！？」

そんな少女の腕を、通りすがった青年が急に引つ掴んで走り出した。もちろん少女にはこの青年が誰かわからない。

「俺は、お前の両親の知り合いだ。あいつらの頼みで、何があってもお前にだけは死なれる訳にはいかない」

青年は、少女に向かってそうとだけ言った。そのあとは、お互い無口に走り続けるだけ。

村中を巻きこんだ大火災。逃げ場なんてもうとつくにないはずなのに、火が2人を避けているかのように道が開けて行く。

少女は、目の前に生きる希望を見出した。

二

青色の髪をした少女に、逃げるつもりはまったくなかった。むしろ、このまま自分の人生なんて終わってしまえばいいとさえ思っていた。

彼女は、昔に両親を亡くし、旅をしながら退魔師として生きて来た。この世界には、“異形”^{いぎよう}と呼ばれる、人でありながら、人でない力を持ったものが存在する。

それらは人間と大差ないため、普通の人間と同じように生活しているものもいるが、凶暴で、暴れることをやめないものもいる。

退魔師と言うのは、そういった危険な異形を始末する人のことを指す。旅をしながら退魔師の仕事をしていた彼女は、ある時この神域に辿りつき、そのまま住みついて今に至るというわけだ。

「ああ、そういえば、前に立ち寄った町でけんか別れたあいつ…もう一度会いたかったな」

ヒュルルルルー

自分は死ぬんだと確定させたうえで思い出を振り返っていた彼女の哀愁漂う彼女の雰囲気をぶち壊しにしたのは、

「あいたっ！」

ポテツと音をさせて彼女の頭上に落っこちた、羽が生えたボール状の物体だった。

「イテ…何が……って！これは…」

自分の頭に着地したそいつを目の前に持って来た時、彼女は絶句した。

が、すぐに平静を取り戻す。

「そっか。やっぱりこの世界は変わり始めてるんだね」

そのボールを見つめながらそんなことを言っている少女。その様子からすると、いきなり頭上に落ちていた物がなんなのかよくわかってるようだ。

「…偶然なのか、必然なのか、そんなことは私の知ったことじゃない。けど、きっと…」

口を開いた少女の言葉が終わる前に、そいつは…まるで中には光が圧縮されていたかのように、内側から様々な色の光を放ちながらはじけて、光とともに跡形もなく消えた。

きっと、これが私の道なんだ

赤と、青の少女を中心に、この時全てが始まった。

零 全てが始まった日に（後書き）

前に消した、夜桜が咲くころにの復活バージョンですが、ストーリーはかなり変わります。
感想、指摘いつでもどうぞ。

壱 旅立ちの時は

—

『私は過去の悲劇を悲しむより、今を笑って生きたい』 夜神秋葉

この世界は、剣と魔法、更には科学までもが交錯する世界。精霊や、獣人、おまけに、異形と呼ばれる異能の力を持つ生き物までいる。

そして、この世界には5つのギルドがあった。北国のクレスト、東国のアキユート、西国のアルトディーバ、南国のパルミューレ、そして中央の国のシルターン。

それぞれに特長があり、この世界の者は、14才になるとその内のいずれかに入ることができる。

それで、この私、夜神秋葉は今日14才の誕生日を迎えた。

「ティムー、起きて起きてー！」

早朝、カンカン、とばかりかい金属音が鳴り響のは、勿論私の所為だ。

14歳の誕生日、つまりはギルドに入ることが許される年齢になっ

た初日。

今日が私の旅立ちの日だ。というわけで、いつもより早く起きてしまったので、そのまま早くから出発しようと思いい立ち、今に至る。

「ん…。どうした秋葉。今日は無駄に早いじゃないか」

フライパンとお玉を手に持ち、甲高い音を響かせたおかげで起きて来たこの人はティム・マーチって言って、私が3年前、この神域を襲った火災から逃れてから一緒に住まわせてもらってる兄がわりの人だ。

「今日は、私の誕生日！よって早くに旅立つので準備、準備！」

「準備って…俺が準備することなんてないんじゃないか？」

ティムは寝起きがとってもいいから、寝ぼけてるわけではないはずだけど、重要なことをすっかり忘れている。

「ないことないよ。ほら、朝ごはんの準備」

「…お前、旅立つんだから料理くらい練習しておけよ」

そう、私はドがつく料理オンチ。どんな簡単な料理であろうと、い

ざ挑戦してみると出来上がるのはいつも気持ち悪い物質。

ティムと会う前で、両親が不在の時も多くあった。でもその時は親友の、旅人ながら神域に住みついた退魔師、レイユ・アンジュに作ってもらっていた。

ちなみに彼女は3年前の火災で亡くなっている。

亡くなっていると言っても、あまりに大きな火災で、死体の判別が出来ていないからはつきりとは言えないが。

「まあ、それより、他の準備は終わってるから、後朝ごはん食べて出発するだけだよ」

「仕方ないな……」

二

「んー、やっぱりティムの作ったご飯は最高だよー。明日からこのご飯食べられないのは、少し寂しいかなー」

ギルドに入ったら食堂とかあるのかな。もしなかったらどうしよう、とかそんな他愛もないことを考える。

やっぱり、なんだかんだ言っても生まれてからずっと住んでたこの地を離れて異国に行くのはちょっと心配なんだよね。

と、そんな時、

「秋葉、お前『クレスト』に入るんだよな。そこにいる俺の友人に連絡とつてあるから心配するなよ」

と、私の心中を知ってか知らずかそんなことを言ってくれた。ティムの友人つて、確かフラウ・グローリアつて名前だった。機械についてのエキスパートで、超天才なんだとか。だから、機械系、科学系を専門としたクレストでは、結構いい立ち位置にいるとか。

幸い、私も何度か会ったことがあるし、結構気が合う人だったからこれはありがたい。

「うん、ありがと。ティムも、今日ギルドに帰るんだよね」

「ん？ああ。王雅とエフが待つてるしな」

今のティムが言った2人は、ティムがギルド『シルターン』と一緒にパーティーを組んでる仲間なんだつて。まだ私は会ったことないけど、ティムの仲間なんだからきつといい人たちなんだろうな。

「よし、じゃあ、そろそろ出発かな」

ご飯を食べ終わった私はゆっくり立ち上がると、すぐ前の本棚に置

いてある、昨日手入れたばかりの銃『ハーキャット』を腰のホルスターにしまつて、玄関に向かう。

「ああ、ちょっと待て。これ持つかないでいいのか？」

靴を履こうとする私を追つて玄関まで来たティムに手渡されたのは、亡くなった私の親友、レイユの写真が入ったロケットだった。

そうだ、昨日、新しい環境に出るのが不安で、旅を続けていたレイユの写真が入ったこれをしてれば少しは安心できるかもなんて考えてたっけ。

「うん。ありがとう。じゃあ、いつてきます」

「ああ。きをつけろよ」

ティムと別れて、私は故郷『メーズローゼン』を離れて異国『グレファス』へと旅立った。

式 科学の世界は未知の領域（前書き）

更新が遅くなりましたが二話目です。

式 科学の世界は未知の領域

—

近所の街から馬車に乗って『メーズローゼン』の北、『グレファス』との国境付近にある駅まで行く。

グレファスは科学が発達した国であるため、鉄道と言う他の国にはない移動手段がある。私は鉄道なんて生まれて初めて乗るので実はわくわくが止まらない。どれくらいかというと、駅について馬車を降りた時、目の前の段差に気づかずすっ転んだくらい…。ちよつと周りの目が恥ずかしかったよー。

「あ、駅員さん、『グレファス』のギルド街までの切符よろしくー」

「はいよー。お嬢ちゃん、一人かい？」

「そうだよ。もう14歳だからギルドに入るのー」

「そうかい、気をつけるんだよ。『グレファス』のギルド街や首都はあみえて治安が悪いんだ。まあ、ギルド街はたまにギルドの人達が巡回してるらしいから安全と言えば安全だが…本当に気をつけるんだよ」

「はい。わざわざありがとうねー」

いやー、いい駅員さんだったなー。あつちについてもあれくらい親切な人ばかりだと嬉しいんだけど…。

都会は怖いからね、知らない人についていけないようにしないと。…そういえば、なんか結局ティムが心配して、ギルドの近くでティムの友達のフラウが待っていてくれることになった。全く、私はもう子供じゃないのに、いつもいつも過保護で困るよー。

おっと、列車が来たよー。なんかすごいねー。電気つてので動いてるんだっけ？原理はよくわかんないけどすごい乗り物だねー。科学

つてすごいねー。おお、景色がすごい勢いで流れて行くよー。

「ねえ、お嬢さん、隣いいかな？」

「ふえ？あ、どうぞ」

景色に夢中になってたところから声をかけられた所為でビツクリしてつい変な声がでてしまった。…不意打ちする方が悪いんだよー、私の不注意じゃないよー。で、声をかけて来たのは長い銀髪の優しそうなお兄さん。っていうか、なんで席他に空いてるのに隣座るんだろ。

「お嬢さん、君はこれから『グレファス』に行くの？」

「そうだよー。ギルドに入るの。お兄さんはー？」

「んー、僕は首都の方にね。知り合いに直接会って話したい事があるから」

話したい事あるのにわざわざ会いに行くんだー。電話とかじゃダメなのかな。まあ、電話つてのがどういのかとかは詳しく知らないんだけど。あ、恋人かな？なんか急に会いたくなつたとか…。と、それにしても今思ってたけどお兄さん、銀髪なんて珍しいなー。金髪とかは何回か見たことあるけど銀なんて初めて見たよー。まあ、目は青色なんだけどこっちは普通な感じだね。

「あ、そうだ。お兄さん、名前教えてくれない？」

「え？名前…？いいけどなんでまた…」

「いやー、お兄さんみたいな銀髪って珍しいから、自慢できるかなって」

「あー、確かに珍しいからね。僕はクロム・スキルショット。君は？」

「私は夜神秋葉^{やがみ}。『メーズローゼン』の人だよー。」

「夜神……そつか、うん。覚えとくよ。あ、そうだ。君、『メーズローゼン』からってことはもしかして獣人？」

うわ、クロムさん勘いいなー。今更公開な情報だけど私は獣人だよー。あ、獣人って言っても限りなく人に近いからねー。一口に獣人って言ってもほとんど獣に近かったり、ほとんどが人の姿に近かったり、色々あるんだよー。ちなみに私は“鬼”の獣人。鬼っていうと獣ってイメージじゃないけど、他の獣人は親の片方と同じか、片方が大半でもう片方も少し混ざってるって場合（ハーフともいうね）もあるけど、鬼の獣人はメーズローゼンの神域にしか生まれられないの。そのかわり、親は片方が鬼の獣人であればOK。あ、でも鬼なんて珍しいからあんま人にばらしちゃいけないんだよー。

「あ、うん。そうだよー。だから頭隠してるのー」

「あー、そういうことなんだー。そういえば僕の知り合いに竜の獣人っていたけど、それって珍しい？」

竜？竜の獣人ってたしか昔の火事の時私を助けてくれた人もそうだったような気がする。でも、結構珍しそうだよなー。竜だし。

「んー、たぶん珍しいと思うよ、たぶん」

「そなたたぶんを強調しないでよ。あ、僕この駅だからもう行くねー」

「あ、うん。ばいばーい」

つと、ていうかさつきから話してたせいで気付かなかったけど、首都すぎたってことはもうすぐギルド街だ。いやー、なかなか快適な旅でした。

電車は徐々に速度を落としていき、慣性の法則というのに従った私の体は、電車が止まるのと同時に誰もいない座席にポスンと軽い音を立てて倒れた。

「いやー、意外とこれ楽しいわー。『グレファス』の人って電車乗るたび毎回この感覚楽しんでるのかなー。なんか羨ましいなー」

少し新鮮な気分で、開いた扉から外に出ると、そこはまさに都会と言った感じで。私には入って出ただけで世界が変わってしまったように思えた。行きとは違う、自動の改札に切符を通し、駅の外に出ると、目の前には商店街。これこそがギルド街。戦闘に必要なものから日用品、さらには食事までなんでもそろう商店街。さらにおくを見ると、三、四階建てのビルもいくつか並んでいる。これが首都になるともつと高いビルがたくさんあるらしい。いやー、想像できないよー。

つと、よし、あんまきよろきよろして田舎出身バレバレな行動したくないし、そろそろギルドに向かおうか。えっと、ギルドにはこの商店街を抜けると着くんだっけ。

とりあえず呆けてばかりもいられないので、とりあえずギルドの方向に向かって、商店街の方に歩き出した。が、その時、

「おい、その女」

「はい？」

後ろから声をかけられたため、立ち止まって振り返るとそこには、背が高く、目つきも少々悪い、しかしどこことなく幼いような顔立ち

…つまりは童顔の青年が私を睨んでいた。

「お前、見かけない顔だな。やっぱお前が奴らの協力者の『異形』なんだろう？」

青年は、冷たい声音で言い放つと、腰に下げた剣を抜いて構えた。
『異形』っていうのは生まれながらになんらかの能力を持っている人の事で（まあ、体質みたいな）西国のメイトルパに多い人種だ。特に親が『異形』の場合に生まれやすいが、普通の人間の間に生まれることもある。『異形』というだけあって、人間離れた能力を持つ人が多いが、同じ能力でも個々の力量によって能力の大きさも変わる。例えば治癒能力でいうと、どれだけ大きな傷を負っても一瞬で治癒する人もいるし、人より少し回復が早いという、本当に体質と言える程度の人もある。だから簡単に誰が『異形』だとか言いきれないし、差別にもなりうるので最近では能力の大きさによって呼び方を変えるだとかをしようとする活動もあるらしいけど、その前に、何コレ。命の危機！？

「あ、ちよつとストップ！私は『異形』じゃないよー。それに私、ギルドに入るために異国から来ただけで…」

「煩い。分かりやすい嘘吐くな。この国のギルドに入るために異国からくる奴なんてそうとうの変わり者くらいじゃない」

自分はその変わり者なわけだが、わざわざ言ってもどうせ信じないだろう。

…それにしてもそんな断言しなくてもねー。
言葉にはださずに心の中でそう思っただけ。

「そんなこと言われても、そもそも本当に異形じゃないし…」

「ああ？ 知るかよそんなの。もし違っててもかまわない。斬りやあ嘘かどうかわかる」

「無茶苦茶だ！」

私の抗議の声を全く効かず、青年は私に斬りかかってきた。
というか、『異形』は体質みたいなものだし、切っても『異形』かどうかなんてわからないよ！

貳 科学の世界は未知の領域（後書き）

自分の趣味で突っ走ってる小説なんでどこかで矛盾が出てくるかも…。

できるだけ矛盾がでないように頑張ってます。

二話目で早速命の危機に瀕した秋葉ちゃん、無事にギルドまでたどり着けるんでしょうかね…。

参 機械ギルドの天才化学者

—

「全く…君には学習能力という物がないのかい？」

生命の危機を感じて目を瞑っていた私が、ふとそんな言葉を聞いて目をあけるとそこにはさっきまで私に襲いかかろうとしていた童顔の青年と対峙している、リュックを背負い作業着のような服を着た青年が目に入った。

「邪魔すんなよ。こいつ、ここらじゃ見かけない服装してるし、今度こそ間違い無いはずだ」

「全く、それで何回間違ったと思ってるんだい？」

リュックの彼の言葉で童顔の方は焦ったような顔になり押し黙った。そこにすかさずリュックの彼が33回目だよと付け加えた。という事は、私みたいな目にあつた人が少なくとも後32人いるということ、私は最早驚くのを通りこして、ただ呆れた。

「五月蠅いな。ギルド周辺は特に変な奴らが多いせいで、誰だつて怪しく見えるんだよ！」

「君とか特に変だしね」

「それはお前の方だろうがっ！」

いや、知り合い同士ふざけあうのは大いに構わないんだけど、話の流れがいまいちよくわからないただの被害者をあんまりほつとかないでほしい。…ていうかもしかして私忘れられてる？

「あの…私もう行っていいですか？」

「……あ、」

その反応…やっぱりリュックの人は私を忘れていたらしい。忘れてたって言うかさつきから思い切り蚊帳の外にされてたし。

「ほら、逃げようとしてるだろ！？やっぱりこいつは異形だ！」

はあ、なんだか無性にイライラしてきた。

こんだけ待たされてたら誰でもどっか行きたくなるよ。しかも通行人から奇異の目で見られているということがわかってるからなおさらだ。

一回はつきり異形じゃないって怒鳴ってやろうかと思った矢先、

「…キール、君はやっぱり馬鹿だね。彼女は異形じゃないよ。僕の知り合いだ」

リュックの青年が童顔の青年・キールに呆れたように言った。知り合い、そう聞いた私の脳内は、とある一つの事を思い出した。

「あ…もしかしてフラウさん！？」

「久しぶりだね。秋葉。しばらく見ないうちに随分と成長したみたいだね」

思った通り、やっぱりティムの友達のフラウだった。

…ていうかそれならそうと最初から言ってくればこんなにこじれたことにはならなかったと思うんだけどな。

「まあ、そういうわけだから、君はまたその辺ふらついてなよ。じ

「やっ」

フラウさんは、いまだに私をにらみつけているキールに軽い調子で言うつと、そのまま私の手を引き、通りをどんどん進んで行った。

二

フラウ・グローリアは前にも説明したことがあると思うけど、機械についてのエキスパートであり、天才化学者。おまけに、『クレスト』のギルドマスターとも親しくて、新しくギルドに入る私にとって、これ以上好都合な知り合いはいないだろう。

「ふう、ここまでくればキールも追ってこないだろうよ」

「あ、フラウさん…助けてくれてありがとうございます」

延々と走ったため、私は疲れて息切れをしている。それに比べて、ギルドで色々と仕事をしているフラウさんはこの程度では全く疲労の色など見えな…いや、よく見ると私以上にバテていた。

「そんなお礼を言われるようなことはしてないよ。何より、僕と秋

葉の仲でしょう？それと、君はいつから僕に敬語で喋るようになったんだい？いつも通り喋ってくれた方がいいんだけど」

「あ、そう？じゃあそうするけど…」

ちなみに言っておくが、「僕と秋葉の仲」と言っるのはこの場合「友達」という言葉に訳される。

フラウは小さいころから天才だったため、まず友達がいない。おまけに思考パターンが独創的で、はたから見れば変なところもあるので余計に友達ができない。ティムや私は数少ない友達の一人だ。

だからこそ彼は友達と、友達との約束は何が何でも守る。変だけど心強いいい人だ。

「それはそうと、今日はマスターがいるから秋葉ならすぐにでもギルドに入れると思うけど、一応頑張ってね」

「そんなすぐにでもって…緊張するよ」

ギルドに入る手続きをするにはまずギルドマスターと直接会わないといけない。ギルドマスターがギルドに入ること許可すれば、どんな人でもギルドに入ることができる。

「緊張しなくても大丈夫だよ。それより一応ひとつだけ言っておくよ。マスターに聞かれた事には、全て本当の事を答えて。それが、一番君のためになるから」

「？うん。わかったよ。別に嘘つく必要なんてないしね」

「うん。それさえわかってもらえれば他に僕から言う事はないよ。ちょうどギルドについたし、頑張ってねー」

「え！？ちょ、まっ、そんないきなり！？」

話に集中してて気付かなかったけど、フラウの言葉を聞いて周りを見てみるといつのまにかギルドについていて、フラウがなにか入り

口にいた女の人と話してると思ったら、今度はその女の人によって私はギルドの中に連行されていった。めまぐるしい場面展開で私の頭は正直全くついて行けてない。ちなみにフラウはというと、私の気も知らずに笑いながらのんきに手を振っている。そんなフラウを見て、後で頭殴ってやろうかな、なんて思ったのはここだけの秘密にしておこう。

三

「あ、えつと、初めまして…夜神秋葉です…」
「ああ、あなたがフラウの言っていた…初めまして。『クレスト』のギルドマスターマイティ・ハーツです」

結局、緊張する暇さえなくとんとん拍子でギルドマスターとの面会。『クレスト』のギルドマスターははじめてみたけれど、肩までの金髪に、細身ですらった体で、結構カッコいい人なんだけど、左目に片眼鏡をつけていて、総合的に言うと穏やかで物静かな雰囲気

の人だ。

でも、そのせいで逆に空気が重く感じる。これが無言の圧力プレッシャーと言ったところだろうか。

私がそんな圧力に必死で耐え抜こうとしていると、唐突にマイティさんが口を開いた。

「…フラウに聞いた時からずっと気になっていたのですが、あなたの出身は…もしかしたらメーズローゼンの神域ではないですか？」

な、なんてピンポイントな質問…。その通りだし、フラウにも本当の事をつて言われてるから、なんでそんな細かい質問なのかちよつと怖いけど正直に言うべきだよな。

「あ、はい。昨日までそこで暮らしててました」

すると、マイティさんは少し怪しんだような表情になってもう一度質問してきた。

「本当ですか？あそこはあの火事のままになっていて人が暮らすところなどないはずですが」

「あ、そうでしたね。じゃあ、詳しく言うと、住んでいたのは神域じゃなくて、神域近くの高台になりますね」

そっか。一応あそこも神域に入ると思ってたけど、地理的には違うのかもしれない。

「高台というと…家はひとつしかありませんが、あの家に住んでいたんですか？」

マイティさん、詳しすぎる。なんでそんな細かな地理情報知ってる

んだろ。神域なんて結構な田舎なのに…。

「はい。火事の際に助けてもらったついでに昨日までずっと住まわせてもらってました」

「なるほど。それで昔に比べてあまりティム・マーチの姿をみなかったわけですね」

ティムのことも知ってるんだ…。まあ、ティムは強いから他のギルドに知られてても不思議はないけど…。

「まあ、前置きはこの程度で…確認も取れましたし、ここから本題です」

「ま、前置き…！？」

今ので前置きって、長すぎる…！全部話し終わるのにどれだけかかるのっ！？

「そんな気にしなくてもすぐに終わるので心配しないでください。あなたは、神域で神の儀式をしたことがありますか？」

神の儀式…？ああ、あの巫女服で舞うやつか。

神の儀式ってのは、うん。そういうやつなんだけど、何のためにやるのか詳しくは分からないんだよね。終わった後に黒い石の入ったペンダントももらったけど、それも何の意味があるか知らないし。そんなのの何を何で聞くんだろっ？

「昔にありますけど、それがどうかしたんですか？」

「もう少し待ってください。では、こんなものを見たことがありますか？」

私の質問を軽くあしらうと、マイティさんはどこからかニュツと取りだした大きな写真を目の前で持った。正直、こんなに大きくする意味はないと思うし、マイティさんが見えない。

それに、写真と言っても、実際に撮ったものではないようなので、お得意の科学技術による合成だと思う。

それで、そこに映ってるものというのは、具体的に言えばボール。手のひらサイズのボールに、縦と横で十字に交わっている輪がついていて、2枚の羽まで生えている。ボールは紫っぽい色をしているが透明で、奥の景色がうつすら見える程度、そして薄く見える内部の中央が何やらぼんやり光っている。正直言つてよくわからない物体だ。

「…少なくとも私の14年の人生ではこんな変な物質を見たことはありません」

「本当ですか？もし見たとすれば例の火事の時期だと思っんですが」

火事の時期ねえ…。確かにその時の記憶は他の記憶なんかより鮮明に残ってるけど…こんな変な物体見て覚えてない方がおかしいような…。

「そのころなら確実に見てません。ええ、もうバツチリ断言できません」

「そうですか。では…そのペンダントを少し見せてもらえませんか？」

「え、ああはい。どうぞお好きなだけ」

私は服の中に隠れていたペンダントを取り出してマイティさんの目の前に出す。するとマイティさんはそれを手に取り、全体を軽く見るとすぐに返してくれた。

「もういいですよ。ありがとうございました。あと、勿論あなたは合格なので、さっきの人に部屋を案内させますね。部屋を把握したら、まだ外には出ずに部屋の中で待機しててください。私から、もう少し話したい事がありますので」

「あ、はい…え？ちよ、待って……」

流れが速すぎる。というか、合格つて言う時のノリが明らかに軽かったから一瞬何を言われてるかわからなかったよ。

とまあ、色々と思いを巡らせているうちに、さっきの女の人にまたもや連行されて、私の部屋へと案内された。…案内つて言うか、行きと同じように腕を掴まれて連行される形だ。形どころか普通に連行のレベルだ。気遣い丁寧さも全くない。こんなのでよくクビにならないなど、不思議に思うほどだ。

…なんて、自分の置かれている状況を逐一説明してみたこの私、夜神秋葉さんですが、今一番の死活問題は、女の人に連行という形で案内されていることでの、周りからの冷たい奇異の目線が体中に突き刺さっていること…！

誰か、この状況をどうかしてください…。

参 機械ギルドの天才化学者（後書き）

ようやく3話目です。

次は珍しくシリアス展開になるはずなので早めに投稿したいんですがはたして奏音にできるのか…。

ちなみにスマ@の方を読んでくださっている方ならおなじみ（？）の玲羅はいつになったら出てくる事やら…？

そろそろ別視点から伏線でも張った方がいいのだろうか（え

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5435r/>

夜桜乱舞

2011年10月10日11時35分発行